

校内音楽放送は学校文化の源泉

—児童に身近な音楽を通して音楽科の表現と鑑賞の融合を考える—

School Background Music as a Source of School Culture: Its Bridging Role for Music Classes

岩川 みやび¹⁾

Miyabi IWAKAWA

概要

校内音楽放送は連絡・合図の手段である。そして、同時に音楽が流れてくる。その流れてくる音楽が全校児童にどのように受け入れられているのだろうか。その音楽でその学校全体のイメージなど、どのような印象を与えているのだろうか。そのことを明らかにするため、卒業生に出身小学校のことを振り返って、当時の母校はどうだったのかを思い出してもらい質問紙調査を実施した。

本研究の目的は、質問紙調査への回答と記述内容について分析した結果を検討・考察することである。また、児童に身近な音楽について検討し、校内音楽放送と音楽科との接点、音楽科の表現と鑑賞の融合について提言を行う。

キーワード：小学校 / 校内放送 / 特別活動 / 音楽科 / 鑑賞

Abstract

In elementary schools, school announcement is used as a means of conveying information, often with background music. Given the frequent use of the school background music, this study explored how students perceived it. To this end, a survey was conducted for 620 university students and adults. The participants answered when and what kinds of school background music they heard in their elementary school days. Based on the responses, this paper suggests the potential role of school background music in cultivating school culture. In addition, how it should be collaborated with music classes is also discussed.

Keywords: Elementary school / School Background Music / Special Activity / Music Class / Music Appreciation

1. はじめに

1.1 研究の目的

小学校音楽科では、音楽に親しみ生活を明るく潤いのあるものにしようとする態度が養われることが求められる。そこで、校内音楽放送を手掛かりに多くの音楽に触れる機会を与えることは、音楽に親しむことにつながるのではないかと考えた。

本研究の目的は、校内音楽放送の実際を研究し、校内音楽放送に関して質問紙調査への回答と記述内容に

¹⁾ 共栄大学 教育学部

ついて分析した結果を検討・考察することである。また、質問紙調査の中から出された、児童に身近な音楽について検討し、校内音楽放送と音楽科との接点、音楽科の表現と鑑賞の融合について提言を行っていく。

1.2 研究方法

本研究では、10代から60代の幅広い年齢層に質問紙調査を実施し、それをもとに検討考察する。主に教員養成を行っている筆者の勤務大学の学生を対象とする。この調査は、無記名で、世代（歳代）と出身地（小学生時の出身都道府県名）の記載を求めた。さらに聞き取り調査も行い、校内音楽放送の有無と使用されている楽曲の実態を検証する。

2. 音楽が響く学校生活の状況

2.1 実態調査のまとめ 全回答者数 620人

調査対象者については、アンケート方式で大学教員の周辺の関係者に実施した。その結果、主に大学3年生4年生が圧倒的に多くの回答数となった。無記名で、世代（歳代）と出身地（小学生時の出身都道府県名）の記載を求めた。

○世代別回答者数の内訳

10歳代	196人 (31.6%)
20歳代	309人 (49.8%)
30歳代	30人 (4.8%)
40歳代	35人 (5.7%)
50歳代	29人 (4.7%)
60歳以上	21人 (3.4%)

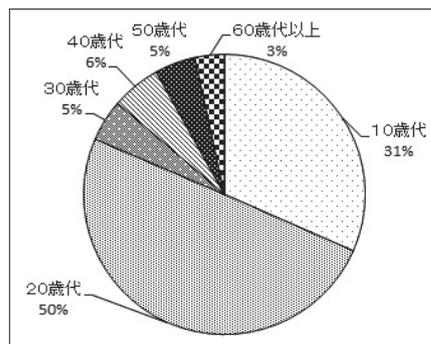


図1 世代別回答者数の内訳 (%)

10歳代と20歳代は、筆者が関係する大学生を対象にアンケートを実施した。従って10歳代のほとんどが大学2、3年生であり、20歳代は大学3、4年生であるので、いずれも20歳前後の年齢層である。

○出身地域別回答者数の内訳

地方によって特色があるかどうかの傾向を把握しようとするアンケートを実施したが、結論的には大きな違いはなく、全国的に同様な実態があることがわかった。そこで出身別集計を回答者の出身地から大きく3地域にまとめた。

□総数 地域（出身地）別 620



図2 出身地域別回答者の内訳

■関東圏 516 1都6県（多い順）

埼玉県 (313) 千葉県 (71) 東京都 (48) 茨城県 (36) 栃木県 (28) 群馬県 (11) 神奈川県 (9)

■関東以北 69 8 道県（多い順）

長野県（16） 新潟県（15） 秋田県（12） 福島県（12） 山形県（5） 青森県（5）
宮城県（2） 北海道（2）

■関東以南 35 18 府県（多い順）

愛知県（4） 静岡県（3） 石川県（3） 沖縄県（3） 岐阜県（3） 滋賀県（2） 福井県（2） 鳥取県（2）
鹿児島県（2） 京都府（1） 大阪府（1） 広島県（1） 山口県（2） 高知県（1） 愛媛県（1） 福岡県（1）
熊本県（1） 長崎県（1） 和歌山県（1）

2.1.1 校内の音楽についての実態調査の集計（まとめ）

総数 620 人（左人数，右カッコ内百分率）

表1 世代別及び出身地別も含めての回答者数の実人数

		はい	いいえ	思い出せない
校内で音楽が流れていましたか				
1	登校時間帯	226 (36.5)	339 (54.7)	55 (8.8)
2	業間の休み時間（業間活動含む）	164 (26.4)	417 (67.3)	39 (6.3)
3	給食時間	562 (90.6)	44 (7.2)	14 (2.2)
4	清掃時間	421 (67.9)	164 (26.5)	35 (5.6)
5	昼休み	196 (31.6)	382 (61.6)	42 (6.8)
6	放課後（下校時間帯含む）	220 (35.5)	362 (58.4)	38 (6.1)
7	放送委員会（音楽委員会含む）	578 (93.2)	19 (3.1)	23 (3.7)
8	ノーチャイムでしたか	79 (12.7)	527 (85.0)	14 (2.3)

2.1.2 集計結果の分析

表2 放送の時間帯ごとの最多項目

1位	放送委員会が「あった」	93.2%
2位	給食時間中に「音楽があった」	90.6%
3位	チャイムが「鳴っていた」	85.0%
4位	清掃時間に「音楽が聞こえた」	67.9%
5位	業間休み時間に「音楽はなかった」	67.3%
6位	昼休みには「音楽はなかった」	61.6%
7位	放課後の時間帯では「音楽は聞こえなかった」	58.4%
8位	登校時間帯では「音楽はなかった」	54.7%

表2からも全国的には、小学校高学年の委員会活動の「放送委員会」はほぼ設けられていたことがわかる。しかも世代や地域による偏りもなく、校内放送は児童の手に委ねていたと考えられる。また、給食時間中の放送には、音楽を主とした内容で給食の楽しさが増幅するような工夫の一つでもあったようである。

さらには、児童の時間管理としてのチャイムが、ノーチャイムの学校が1割強あったことには特筆すべきである。そして意外なことは、放課後の放送や音楽が多く为学校が行っていると想定していたが、回答結果は放送なしが上回っていることである。また、登校時間帯の放送には世代別が顕著に現れていた。10歳代のみが「放送音楽があった」が一番多く、20歳代以上は「放送は流れていなかった」とする回答が多かったのである。

今回の質問項目は、放送で音楽が流れているであろう時間帯を予測してのものであったが、「業間休み時間帯」が実は放送や音楽がなかった学校数が多かったことは筆者自身の予想とは異なっていた。

いずれにしても、学校の生活日課の中で、児童たちの活動や行動の要所で校内放送は、規則正しく活用されていることがうかがい知れた。

3 校内放送で流れる音楽の分析

3.1 「登校時間帯」の音楽放送

ア 実態把握 世代別グラフ

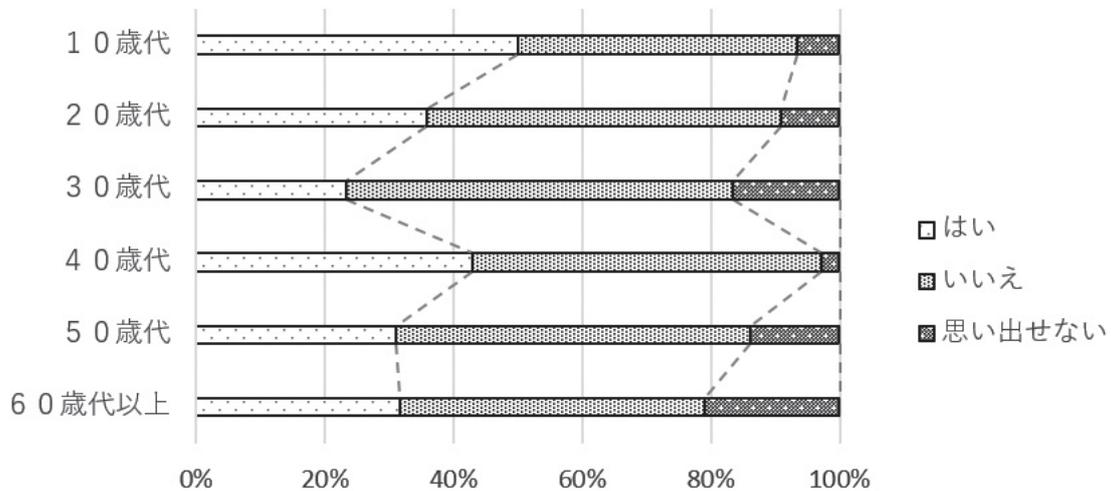


図3 登校時間帯の音楽放送の有無

イ 小学生の朝の登校情景

流れる BGM の曲によっては学校の朝に変化が起きる。

明るい活動的な曲であると、集団登校してくる児童がとりわけ心もうきうき、澁瀬としてくる。登校班は、交通安全教育の安全面を考えた集団行動体制であるが、縦割り活動の1つでもある。

日本中の小学校は同じ年齢の児童たちで学年を編成し、9年間の義務教育の学校生活を行っている。しかし、社会人の会社組織等では同じ年齢の編成はほとんどない。そこで、小学校でもその将来を見据えて横割りの学年編成を縦割りにして活動させる行事を実施している。中でも登下校時の集団は近所の児童同士での編成であるから、集合場所から児童のみならず、低学年児の送りにきた保護者との交流が始まる。

近年、通学路上で行き会う交通指導員や PTA の方たちと地域の住民で結成する学校応援団が防犯上の見守り隊として立哨指導をしている。多くの大人の方たちと朝から触れ会いの中を通して校門に到着する。そこで待ち受けているのは、校長や PTA の方などである。学校では校長中心に挨拶運動の一つとして実施している。

このように一昔前と比べてみても多くの地域住民の方々の支援があつての登校風景となっている。そこで流れる音楽は、学校生活上ではよしとしても、早朝の住宅街など街並みに逆に迷惑をかけないように校舎内のみ聞こえるように放送するなどの配慮が必要となる。

この放送を誰が操作をするのかというと、児童では難しいことになる。なぜなら、放送係の児童が早く登校しなければならないからである。そこで教員がその係を担う訳だが、勤務時間も含めて難しい時間帯であるとも言える。調査では多く学校で朝から BGM が流れていることから考えると、各学校が創意工夫をしていることが理解できる。

3.2 「業間休み時間（業間活動含む）」の音楽放送

ア 実態把握 世代別グラフ

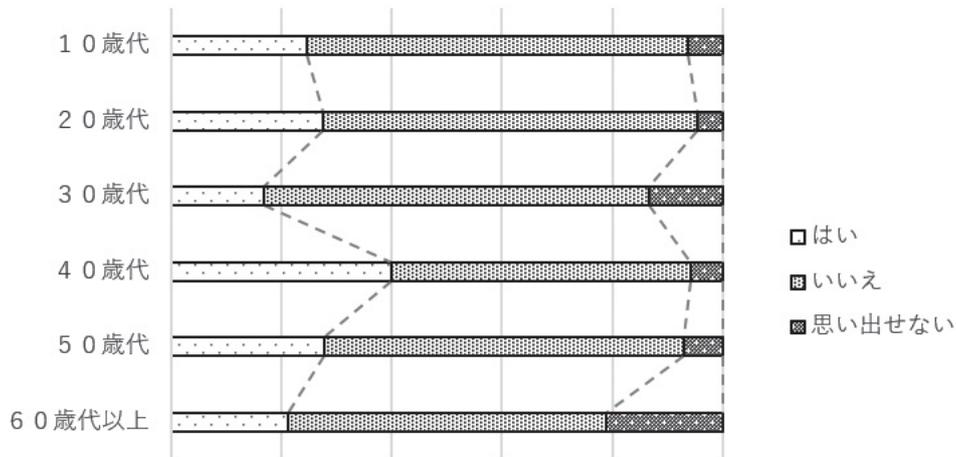


図4 業間時間の校内放送の有無

イ 小学校の業間休み時間の情景

「いつもの音楽が聞こえる，児童みんなが校庭に出て遊んでいるね」と近隣住民の方々には，日常のリズムの一つになっていることもある。

児童にとって業間休みとは，午前中の少し長めの休憩時間（2時間目と3時間目の間）のことである。15分から20分間くらいの時間をとっている学校が多い。その多くの学校が文字通り「晴耕雨読」を努力目標にしている。どの児童も天気の良い日は外で元気よく活動的に，雨の日は校舎内で静かに読書をいそしむ姿を目指していることになる。もちろんそうではない児童もいるので，一人一人の心身の状態を把握しながらその児童に即した指導をしている。

学校生活日常のリズムとして業間休みに「外で元気に遊びましょう」との掛け声とともに背中を押しているのが，放送委員の仕事で流れてくるBGMである。その音楽が行動を促す一助ともなっていると考えられる。そして児童と一緒に校庭で動き回る先生たちの姿もある。

授業と授業との間の休憩時間は，児童にとっての大切な休み時間である。それを小学生は通称“遊び時間”と言っているが，教員には休憩時間ではなく勤務時間としているのが多くの学校の実態である。勤務時間であることもあり，校庭や教室で児童と一緒に過ごす先生の姿が見えるのである。全員ではなく職員室に戻って，打ち合わせや次時の準備などしている教員もいる。児童も教員もみんなが音楽に合わせて，業間マラソンや大縄跳び，あるいはレクリエーションやゲームなどに楽しく触れ合うプログラムもあり，学校の伝統的な良き姿でもある。

3.3 「給食時間」の音楽放送

ア 実態把握

世代別

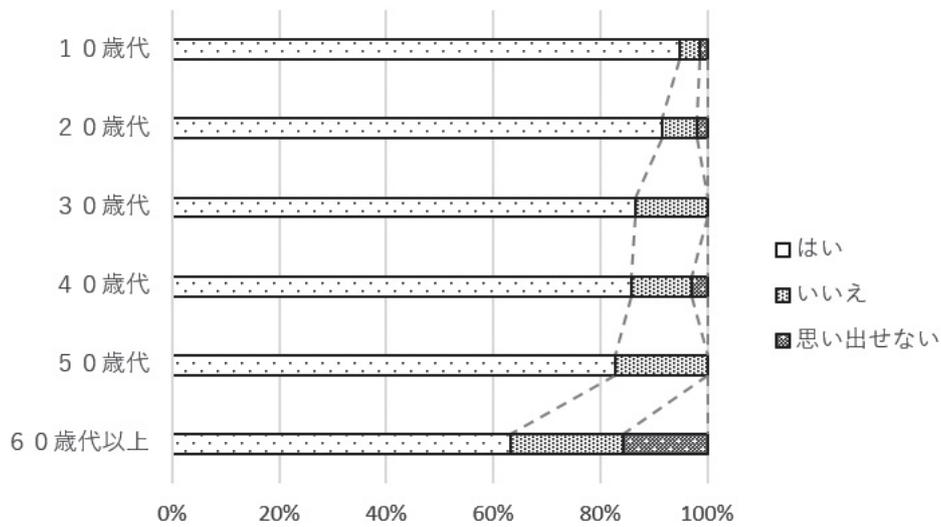


図5 給食時間の校内放送の有無

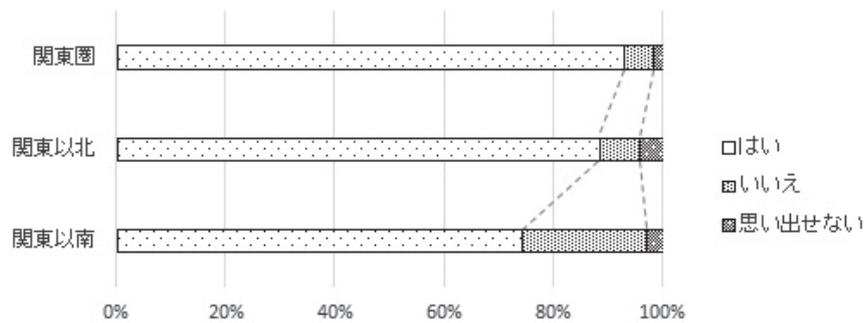


図6 地域別 給食時間の校内放送の有無

イ 小学生の給食情景

給食時間帯こそ、放送委員会の腕の見せどころである。

この時間は、配食の準備の段階、食事中、後片付けと選曲に事欠かない時間帯であると言える。4時間目終了のチャイムが鳴り終わったら、児童にとっての一日の最大のイベント“ザ・給食!”である。班ごとに机の移動やテーブルの用意、どれをとっても「めんどろ」と思う児童はほとんどいない。一日のうち、学校で物を食べられるのはこの時間のみである。社会人や大学生、場合によっては高校生よりも実は小学生の方が間食はしない。食事開始がおおよそ12時40分くらいからとなる。

開始時間になると、音楽がいつもとても軽快でさわやかな曲が流れ、児童の心の中には「やった、給食だ」という高揚感が充満する。そしておしゃべりをしながら皆で食べる給食はとても楽しく美味しいものである。教員は児童と一緒に食べるから昼食休憩時間と思われがちだが、この時間も勤務時間であり、特別活動や保健学習などの学習内容にあるように給食指導や食育に該当する指導の時間にあたる。

その時のスピーカーから流れる曲は、放送委員が全校児童にリクエストをとって、多くの児童が知っているメロディーが聞こえて楽しさは倍増する。教員も「これが今流行の曲か」とジェネレーションギャップを埋める機会ともなる。

本調査では、以下のような記述式のアンケートも行った。

あなたの小学校で上記以外に特色のある音楽活動がありましたら紹介してください。
また、流れていた音楽で曲名を覚えていましたらお書きください。

この回答から傾向がみえてきたのは、給食時にかかる音楽は、クラシック音楽とリクエスト曲の2分類があるということであるそれぞれの具体的な曲名は以下の通りである。

クラシック音楽

- ・トルコ行進曲5 ・ドボルザーク新世界より4 ・くみ割り人形3 ・剣の舞2 ・シンコペティッドクロック2
- ・ワーグナー ・リスト「ラカンパネラ」 ・ニュルンベルクのマスタージンガー ・クラリネットポルカ
- ・モーツァルト「アイネクライネナハトムジーク」 ・アルハンブラ宮殿の思い出 ・エーデルワイス
- ・ベートーベン「エリーゼのために」 ・グリーク「朝」 ・パッサリの曲 ・グリーク「ペール・ギュント」
- ・シューベルト「ます」 ・ベートーベン交響曲「第9番」 ・ヴィヴァルディ四季「春」 ・ショパン「別れの曲」

リクエスト曲

- ・嵐「ハピネス」5 ・風の谷のナウシカ4 ・ラピュタ「きみをのせて」4 ・ZARD4 負けないで ・ゆず3
- ・ドラえもん3 ・亜麻色の髪の少女3 ・タイタニック2 ・ポールモーリア2 恋は水色 ・ドリフの退場曲2 ・ビリーブ2
- ・鳥歌 ・情熱大陸 ・チャゲアス ・爆風トランプ ・ホクトきのこ ・せいくらべ ・アンダーザシー
- ・ウォーターボーイズ ・ハウル ・ドラマごくせん主題歌 ・世界が一つになるまで ・エグザイル ・宇宙戦艦ヤマト
- ・カーペンターズの曲 ・ガッチャマン ・ひょっこりひょうたん島 ・スクールウォーズ ・青春アミーゴ
- ・ダンシングクィーン ・ナウマンゾウの歌 ・ダイヤモンド ・生命の息吹 ・優しさに包まれたなら ・ケチャ ・勇気之歌
- ・われもこう ・とおひゃんせ ・宇宙戦艦ヤマト ・ハウルの動く城 ・つばさをください ・メリッサ ・雀の歌

3.4 「清掃時間」の音楽放送

ア 実態把握

世代別

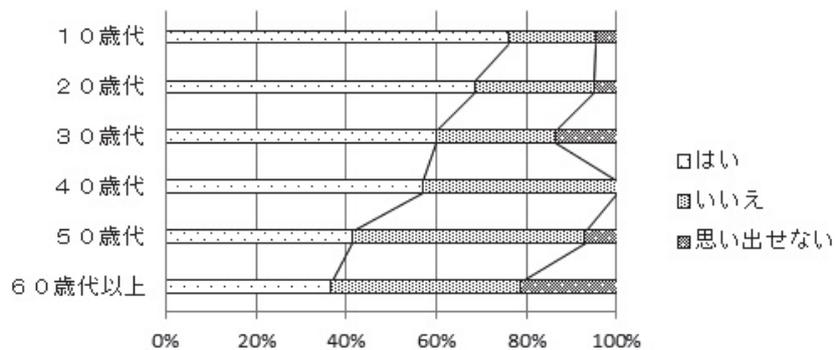


図7 清掃時間の校内放送の有無

イ 小学校の清掃情景

学校によっては「無言清掃」といって、清掃活動中は無言で行う全校指導もある。清掃時間の校内で流れる音楽及び放送は、まさに学校が決めていく裁量の幅が大きいと言える。あくまでも、自校の児童の実態を鑑みての学校長及び教員たちの総意で決められている。

しかしながら、多くの学校は掃除の時間には音楽がなって手際よく時間内で済ませているところが多いと考える。

つまり、清掃時間帯に流れる音楽は、掃除に精を出すことと終了の目途を付けるのには役立っているとも言える。

清掃用具も学校によっては工夫が凝らされている。例えば、あえてその昔からあった道具として、今では

学校でしか見られないようなホウキやチリトリ, 中にはハタキなどまで現在も使っている。特に, 雑巾がけ, 水拭きをさせるために取り入れている場合もある。長い廊下を雑巾がけ, 一気に走り込む, 廊下は走らないではなく手際よく磨き上げる, そのときに軽快なBGMが流れるとますます調子よく, 今の時代には珍しく楽しい種目と化しているものもある。

前述の記述式アンケートによると清掃時間帯の曲としては以下のようなものがあった。

- ・SMAPの曲5 ・世界に一つだけの花4 ・となりのトトロ8 ・ディズニーメドレー7 ・小さな世界 ・ジンギスカン3
- ・ネコバス3 ・エレクトリカルパレード2 ・季節の歌2 ・ビートルズ「ヘイジュード」 ・もののけ姫
- ・ビビデバブデブー ・合唱曲「宝島」 ・原生林 ・キューピーの歌 ・ライオンハート ・もりのくまさん ・アマリリス
- ・カメハメハ大王 ・ふるさと等

3.5 「昼休み時間」の音楽放送

ア 実態把握

世代別

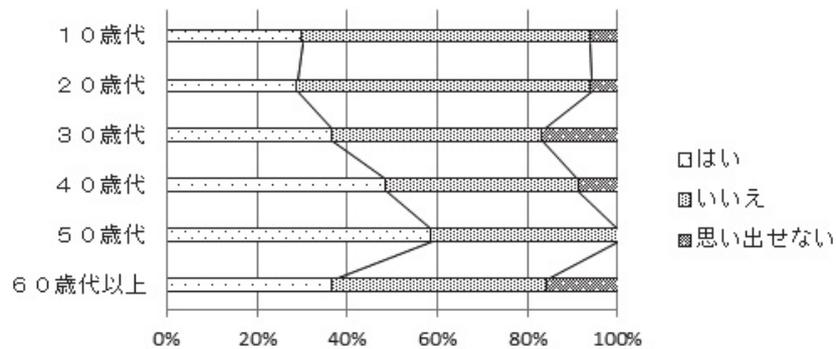


図8 昼休みの校内放送の有無

イ 小学校の昼休みの情景

昼休みはどの休み時間よりも最も長く, 友達同士でいっぱい遊べる楽しい時間である。多くの学校は20分から30分間くらいの時間帯である。この時間帯にあっても教員は指導の時間中である。多くの児童が校庭で遊んでいるため, ときには衝突したり, ボールが当たったりと怪我が発生することもある。その時, 同じ校庭に教員がいることが重要である。小学生は比較的長い時間の昼休みに校内でのけがの発生が多い。従ってその場には教員がいなくてはとの配慮義務からも, 見守りの当番を決めている学校もある。また大勢の児童数の学校では, 昼休みの校庭の使用に学年単位で定め, 交代で使うなどという場合もある。

児童にとって長い遊び時間は, 楽しいものである。それを証明するように, 軽快なリズムの曲が流れていることが多い。学校の敷地内いたるところに子供たちは遊び場を求めているので, 放送の音楽も外まで聞こえるものである必要がある。周囲の地域の方々には「放送がうるさい」とならないよう音量など放送委員の子供たちへの指導が必要となる。

3.6 「放課後（下校時間含む）」の音楽放送

ア 実態把握

世代別

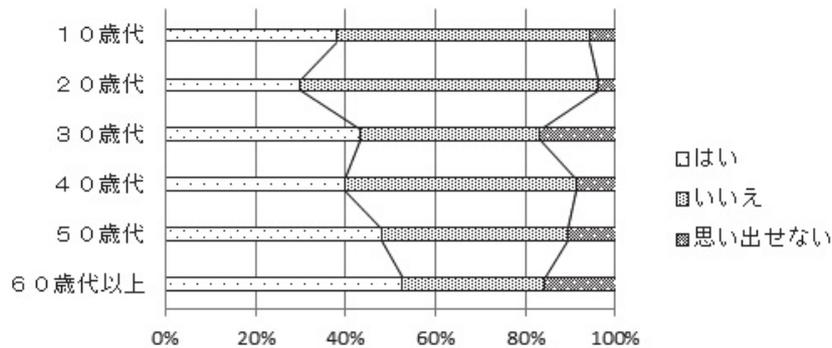


図9 放課後の校内放送の有無

イ 小学校の下校情景

社会的背景で放課後の様子が変わってきている現状がある。下校時での誘拐等の社会的事件に巻き込まれたこともあって、登校時と同じように下校時も集団（班）を組んで帰宅させる学校が増えてきている。そのことによって、授業放課の後、以前のように教員と児童が校庭で遊ぶ姿がほとんど見られなくなった状況がある。

学年や学級によっても帰りの会を終えて校門から出る時間が異なっている実状がある。従って朝のように縦割りの通学班体制は取りにくく、学級それぞれで帰り道が同じ友達同士で帰すようになる。そのような状況のもとでは、放課後に音楽を鳴らすことはほとんど意味をなさなくなる。よって、アンケートの「思い出せない」との回答の中に、音楽は鳴っていなかったというものが多かったと想像できる。

しかしながら、小学校の日課表には、「最終下校時間」を決めて、すべての学年児童が、学年や学級の様々な活動があってもその時刻には学校を出ることが約束されている。例えば、16時にその合図として校内放送で下校するように促すテープを流したり、いつも決まったメロディーを流したりしている。近年は、地域防犯を呼びかける市役所（区町村）の町内全域に聞こえる放送で知らせている自治体がほとんどであろう。中には、「夕焼け小焼け」の曲だったり、その自治体の由緒ある曲（作曲・作詞家の出身地）だったり、または市内全小学校が持ち回りでテープに吹き込んだ子供たちの声で「下校します。見守りありがとうございます」との放送が流れたりしている。町の放送と学校の放送が重なることもある。

学校が家庭や地域社会に責任をもって本日の児童たちの学校教育活動が終了したことを知らせることは重要なことである。

ところが近年、校内のみに聞こえる放送に変わったとの話をよく耳にする。児童を確実に下校させるためには校内放送を使って教員が下校を促す指示を流していることは多くなっているようだが、音楽の何かの曲を流すということはあまりないとのことである。グラフからも10歳代20歳代の小学校時代のほうがそれ以降の世代よりも「音楽は流れていなかった」と回答している割合は多い。このことは、校外にまで聞こえる放送や音楽を流すことは、逆に防犯上からも避けていると考えられる。

3.7 「放送委員会 (音楽委員会)」は学校文化醸成の一助

ア 実態把握

世代別

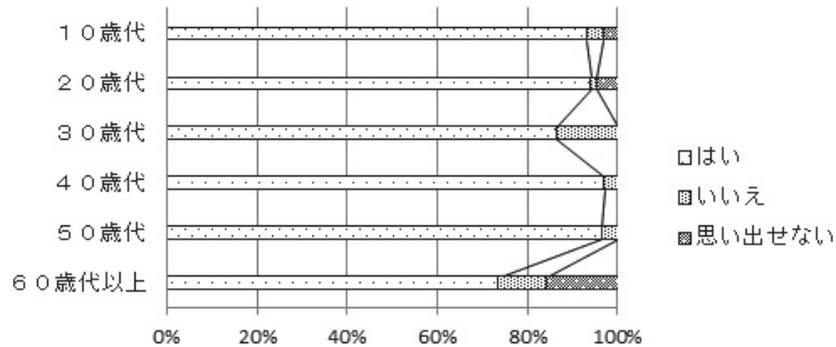


図10 放送委員会の有無

地域別

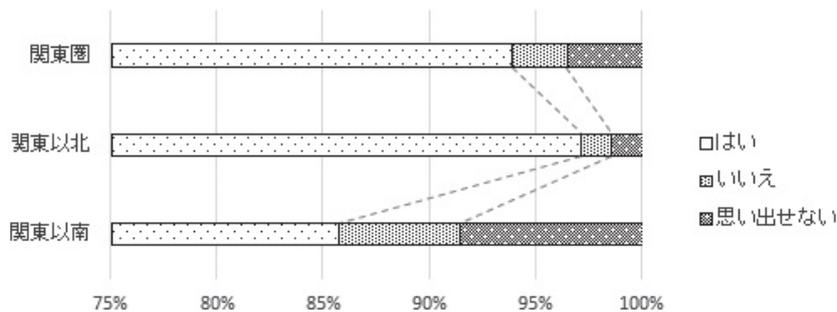


図11 地域別 放送委員会の有無

イ 小学校の放送委員の情景

小学校の委員会活動は発達段階を考慮して、5,6年生に位置付けられている。現行の学習指導要領においては、「児童会活動の目標として、望ましい人間関係を形成し、集団の一員としてよりよい学校生活づくりに参画し、協力して諸問題を解決しようとする自主的、実践的な態度を育てる」と示されている。参加ではなく参画との文言であるから、高学年でからでないと難しいことになる。また、そこには当然各担当教員の指導も重要となってくる。

放送委員に託される放送時間帯にはそれぞれに意義と目的がある。それを委員会活動時には担当教員が指導して理解させる必要がある。特に放送委員にはしっかりとした指導をしないと、ふざけ半分で全校に放送を流してしまい、人権上にも取り返しのつかないことになってしまうことになる。

例えば、選曲も放送委員の裁量で選ぶとしても、担当教員のチェックが必要で、その時間帯の選曲は自由ではなく一定の枠の中で考えさせることが大切である。給食の時間帯は、放送室で委員の子供だけになってしまいがちであるので、担当教員の見守りが必要である。

実際の放送における1つの傾向としては、低学年がマイクを前に話すときは、緊張というより物珍しさからか、あちらこちらが気になり、ゆっくりとした話し方になることが多い。一方で高学年、特に6年生では、緊張のあまりと羞恥心の照れ気味から、話し方が早口になり、聞いていても落ち着かない印象がある。それぞれの発達段階を踏まえた適切な指導が必要である。

教師の指導が入っているかどうかはすぐ結果に表れて、聞きやすい放送となる。ある小学校では、早口になる6年生の放送委員会活動に地域に住む元アナウンサーの方に話し方の要領を教えていただく機会を設け

たところ、もう翌日から聞きやすい速さでしかも滑舌的なことも修正され、聞きやすい放送に変わったそうだ。そして副産物的に「将来アナウンサーになりたい」という放送委員も生まれたとのことであった。

3.8 チャイムは学校生活の時を刻む

チャイムについては、全体のグラフから、見ると620の回答者の中で、79の回答が「ノーチャイム」の学校だったと答えている。約13%の小学校があえてチャイムを鳴らさずに、児童も教職員も時間の管理をしているとのことであった。この数字を筆者自身は多いと感じた。腕時計をしていない小学生が自主的に次の行動に移ることは至難の業であり、そのためには校内の至る所に掛け時計を配備し、それをよく見ることを指導していることも想像がつく。

ア 実態把握

世代別

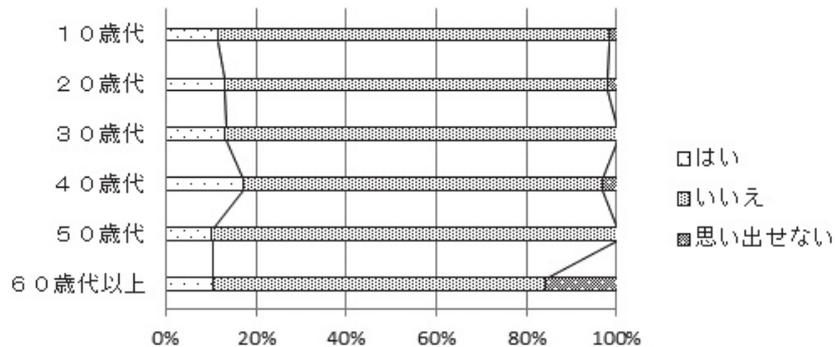


図12 ノーチャイムの有無

イ 小学校のチャイム情景

「一日何回チャイムが必要か」との問いにどう答えるだろうか。

小学校が始業から終業中の一日間で鳴らすチャイムは、6時間授業とすると合計17回、仮に長い休み時間には始業前の予鈴まで含めると20回である。その内訳は、授業時間の始まりと終わりの2回ずつで12回、登校後の自習時間や朝の会から1時間目までに2回、昼には給食終了、清掃時間終了で2回、最終下校時間を知らせるチャイムが1回である。それに予鈴（教室に入る準備合図）まで含めると業間、昼休み、下校時で3回が足され合計20回となる。

時間で日課を管理する教育からは、チャイムは必要な合図である。しかし、学級指導では、チャイムに頼らずに時計を見て自己判断ができるようにとの指導もしている。その指導は学年が上がるにしたがって増していく。

チャイムは、昔は鐘を用務員が持ち歩いて時間を見て廊下伝いに鳴らして歩いた時代もあった。今では自動操作で鳴っている。管理は主に教頭（副校長）が多い。週5日制の曜日でセットされ、土・日曜日は鳴らない。ところが祝日や臨時休業日などあると、自動のセットを修正しておかないと休日にまでチャイムが街中に鳴り響く。学校教員は、休日の静かな朝から一日中、時間割通りにチャイムが刻んで鳴っているとは、と知る由もない。学校隣接の住民からの通報があって初めて知るということもある。土日以外の休日の前日は教職員皆で気に掛ける必要があるだろう。

また、チャイムでよく聞く「キンコンカンコン…」も作曲者がいる曲（「ウエストミンスターの鐘」）である。チャイム代わりに学校独自の曲を流している学校もある。チャイムも校内音楽放送であると捉えることができることになる。

4. 校内放送で流れる曲から見える音楽科との接点

給食時間に流れていた校内放送、清掃時間に流れていた校内放送の曲を見ると、音楽科の鑑賞教材として扱われている楽曲もある。

特に、クラシック音楽は児童に馴染みがあるかどうかは、個人差がある。その中で、常に日常の中で聴いていた「あの曲」が実は、モーツァルトの「アイネ・クライネ・ナハト・ムジーク」であったと知ることができるのは音楽科の授業である。逆に給食の時間に流れている「あの曲」には歌詞がついているので歌ってみようなど、音楽科の表現と鑑賞に抵抗感なく進み、学ぶことができるのではないかと考える。

具体的に示すと、小学校音楽科における鑑賞共通教材は、昭和33年、昭和43年、昭和52年、平成元年告示の小学校学習指導要領（音楽）には示されていた。しかし、平成10年告示の小学校学習指導要領（音楽）からは示されていない。ねらいに即した楽曲を教師が選曲していることになる。その中で、グリーグ作曲 組曲「ペール・ギュント」は以前第6学年の鑑賞共通教材であったし、チャイコフスキー作曲 組曲「くるみ割り人形」、シューベルト作曲 ピアノ五重奏曲「ます」第4楽章は第5学年の鑑賞共通教材であった。校内音楽放送を手掛かりに、音楽科の授業を展開することは十分に可能ではないかと考えられる。普段から給食時間、清掃時間に聴いている音楽だからこそ、「鑑賞」の授業とかしこまらずに音楽に触れることができるものとする。

学習指導要領では、歌唱、器楽、音楽づくりを「表現」領域としてまとめ、「表現」と「鑑賞」の2領域で構成している。これらの活動は、それぞれが個々に行われるだけではなく、相互に関わりあっていることもあると示されている。児童が「音楽を聴くことが好き」「いろいろな種類の音楽を聴いてみたい」「いろいろな種類の音楽を聴いてそのよさを伝えたい」と思えるようにすることを大事にしながら鑑賞の活動を進めることが重要となる。

5. 今後の展望と課題

「校内放送の使い方の意識が変わってきた」と現役の小学校教員が話していた。その昔は、放送で名前を挙げて職員室に呼び出し指導をしたり、教員間の連絡のために「先生方、業間にお集まりください」などの放送をしたりしていた。職員室のマイクのスイッチが入り放しで、外まで先生たちの会話が聞こえていたとの事件もあったようである。時代とともに放送一つをとっても周囲への多くの配慮を必要としている社会的背景がそこにある。むしろ昨今は放送を使わない日常に努めている学校が増えてきているように感じる。

放送施設設備を上手に使って、全校児童の学習活動や集団の行動などにいかに有効に働くかを改めて学校が考えていくことが必要である。適時適宜に放送による呼びかけや流れる音楽で、その学校の文化の香りがする教育文化施設としての学び舎になることを期待する。

そして、音楽科との接点である。校内音楽放送で流れている曲が意図的であったり、そうでなかったりする実態があるが、各学校の教職員が校内音楽放送に耳を傾け、児童とともに歌ったり、味わって聴いたりすることで、身近な音楽をより深く知ることができる機会となる。

校内音楽放送を手掛かりに多くの音楽に触れる機会をもち、児童や教師が意図的に流す音楽を選択していくなどの工夫は大いに可能である。音楽を通して、音楽に親しみ生活を明るく潤いのあるものにしようとする態度が養われるようにしていくことが今後の課題である。

参考文献

1. 図書

- 文部科学省, 『小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 音楽編』, 2018, 東洋館出版社
- 文部科学省, 『小学校学習指導要領解説 音楽編』, 2008, 教育芸術社
- 初等科音楽教育研究会, 『最新 初等科音楽教育法 [改訂版]』, 2011, 音楽之友社
- 新実徳英他, 『小学音楽 音楽のおくりもの』〈日本のうたみんなのうた〉, 2015, 教育出版
- 畑中良輔他, 『小学生の音楽』歌いつごう日本の歌, 2015, 教育芸術社
- 文部科学省, 『小学校学習指導要領』, 2008
- 文部科学省, 『小学校学習指導要領解説 総則編』, 2008
- 畑中良輔他, 『小学生の音楽1～6』, 教育芸術社, 2017
- 新実徳英他, 『小学音楽 音楽のおくりもの1～6』, 教育出版, 2017

